

探求に向けての抑えがたい衝動

(グルジェフ『来たるべき善きものの先触れ』 抜粋)

こうした問題の究明に向けての抑えがたい渴望がどのようにして私のなかに生まれ、どんな理由やきっかけによって発展し、ついには現代の心理学者の手にかかったなら「強迫的なこだわり」と診断されかねないほどの熱狂にまでなったのか。私の作家としての所信を伝えるとともに、ほかのいろいろなことに加え、隣人たちの幸せを願っての私の根気強い活動の新しい段階に向けての「趣意書」ともなるように意図されたこの冊子において、私はその概略について書かずに済ませるわけにはいかない。

この熱狂が始まったのは、私がまだ若く、ようやく責任ある年代にさしかかったばかりのころだった。そして、私がいまこれを言葉にするならば、それはありとあらゆる姿をした呼吸する生き物について、それらが地球上で生命を存続させることの意味全般を厳密かつ明確に理解すること、そしてこの観点から人間にとっての生の意味を明らかにすることに向けての「抑えがたい渴望」だった。

現代人にとっては珍しいものであるこうした渴望が私のなかに形成されていくうえでの土壌としては、まずは最初の要因として、私の生い立ちや私の受けた教育と結び付いた数々の具体的な理由があった。とはいえ、いま思うに、のちに決定的な要因となったのは、ちょうど準備的年代から責任ある年代への移行期においてまったく偶然に私のまわりに生じた状況に違いなかった。これについて簡単に言うなら、その当時、私のまわりにいた同年齢の仲間たちや先輩たちは、ほとんどみながみな、のちにどんどん増えていくところのいわゆる「精神世界オタク」[psychic typicality]になりつつあるか、それともなりきってしまったかのどちらかだった。どうして人はそんなものになってしまうのか。私自身の創設による「人間の調和的発展のための学院」の存続中に私が統計的にこれを調べた結果によると、こうした「タイプ」になってしまう人たちは、具体的な現実を身をもって理解するという点において欠けているものがある。つまり、成長の一段階としてそのような過程を経ることの明白な必要性にも関わらず、準備的年代においてどころか責任ある年代においてさえ、体験に対して身を開いたことがない。その代用として、彼らは他人から提供される空想で満足し、それを種にして妄想じみた観念をこしらえるとともに、同類の仲間としかつきあわなくなる。そしてやがて、科学性を装ってはいるがひどく抽象化されたテーマをめぐる、権威ぶった議論を戦わせることに熱中するまでになる。

私も同時代の若者としてこの異常な流行の影響を受けたので、外面的に私がどんなことをしたかということだけでは、私も彼らと見分けがつかないかもしれない。だが、私は、他のいくつかのとても独自の遺伝的資質に加え、子供時代からのものであるひとつの資質として、尋常ではないこととして自分の注意を引いたことはなんであれその本質を理解せずには気が済まないという衝動とそのような究明に向けての根気を育ててくれる素材となるものを、私の父と私の最初の師による意図的な訓育のおかげもあって、責任ある年代に達するまでにはもう、自分の本性の一部としていた。そのおかげでだんだんに、自分の顕在意識をもっては捉えがたいほどのゆっくりした早さで、私の心には「なにか」が形成されていき、それが明瞭な姿を帯びだしたのは、親友の死から強い精神的な衝撃を受けてからのことだった。そして私のなかに新しく形成されたこの実質は、それ以来、ふつう人の心のなかで特定の思いが自動的に何度もくりかえされることで構築されていく「認知の産物群」との接触を起こすたびに、先に述べたような「抑えがたい衝動」を私の全身全霊に呼び起こすようになった。